



# その練習は作業か稽古か

高知県四万十町から届いた 2 通の熱いお手紙を読んで、感想を書くことにしました。

子どもたちは、お客さんたちがつづった言葉をどのように受け止めたのでしょうか。

幾つか紹介します。

○ひととおり読んでみて、大げさだなあと思った。それと同時に、自分たちのやっていることって、自分たちにとったら当たり前だけど、見てる人からしたらすごいことなんだなと思った。でも、こういうことができるようになったのは、渡辺先生と授業をやったからだから、先生と授業できるのをありがたく思うようにしようと思った。

○思ったことは、まず 4 年生の皆がすごく人々もしくは世間に感動を与えているなんて、これまで一回も思ったことはありませんでした。だからすごく感動を与えまくっていることが印象に残りました。感動を与えるクラスだとは思っていませんでした……。こんなに感動や驚きをこのクラスを生み出せることがやばかったです……。

○やっぱり本気でやると感動を生み出せるんだなあと思った。お客さんたちの感動が伝わってきた。

○前田先生と野村先生は、私たちのレベルをダントツですごいくらいの長さのお手紙で書いてくださって本当にうれしいです！私たちはふつうにやって

いるだけと言っているけれど、昨年の 3 年生の時や、前の学校にくらべてみたら、比べ物にならないくらいのおどろきです。しょうじき私もビックリしています！！

子どもたちの感想文に現れていた内容をキーワードでまとめると、「驚き」や「感動」になるでしょう。

驚きの対象は、野村先生や前田先生の「言葉」に対してもそうなのですが、「自分自身」に向けても感じた子が多い様子でした。

それは、感動の対象も同様です。

変化や成長はゆっくりとしたスピードで徐々に訪れるため、自分たちがどのくらいのレベルに達しているのかを実感することは容易ではありません。

でも、こんな風に外部から来たお客さんたちの言葉を聞くと、「客観的に見たクラスの姿」があまりありと伝わってきますね。

外から来られた方が驚き、その様子を見て自分たちも驚く。

こうしたことが連続的に起きてきている背景には、「日々の努力の積み方」が強く影響していることは間違いありません。

「積み重ねた量はやがて質に転ずる」という考え方があります。

これを、「量質転化」と言ったりもします。

多くの学校や習い事で、この量質転化の法則を信じている人は今も少なくありません。

「やればやるだけ伸びる」と思い込んでいる人も大勢います。

これは、ある部分においては正しいのですが、ある部分においては大きな「ウソ」を含んでいます。

例えば、野球を習い始めた子がいたとして。

量質転化が真実ならば、経験年数と共に全員野球がうまくなっていくはずですよ。

当然ですが、練習量はどんどん増しているのですから。

でも、そうはなりません。

量は全員一律に増えていきますが、上達にはつながるケースとそうでないケースが生まれていきます。

他にも、字にも美しい字とか汚い字があります。

字は生きている限り書き続けているわけですから、量質転化が真実ならば書けば書くほどうまくなるはずですよ。

ですが、下手な字はいくら書いても下手なままだと思うんですね。

これは多くの人が実感できるはずで  
つまり、質に転化しない量が世の中に溢れているということなんです。  
ここまで読むと、多くの人が次のことを思うはずで

じゃあ、質に転化する量って何なんだろう？

と。

この話を、昨日教室で行いました。  
参考にしたのは、次の本です。



この本のキーワードをたった一言で言うならば、「限界的練習」です。  
限界的練習とは、自分の目標に向けて自分で試行錯誤しながら積んでいく練習のことです。

その反対となるのが、「作業的練習」です。

言われたことをするだけ、与えられたタスクをこなすだけの練習です。

つまり、

作業的練習とは、「言われたことだけを行う」練習。

限界的練習とは、「言われてないことも行う」練習。

そのようにも言うことができます。

当然、思ったときに、「作業的」よりも「限界的」に量を積むことが大事な

のは言うまでもありません。

「作業」はいくら積んでも質に転化しないケースが山とあるからです。

先ほど例示した「字」もそうです。

下手な字をいくら書き続けても、これは「作業」だからうまくならない。

野球の素振りもそうです。

明確な目的意識がない限り、その素振りは単なる腕の運動です。

下手な字を書き続けているのも、これは作業であり、単純な手指の運動に過ぎないわけです。

これは、ありとあらゆることに言える法則です。

勉強も習い事も同じで、作業になっている限り中々上達しません。

でも「限界的」な練習になるとうまくなるんです。

この限界的練習は、言葉としては長いので、短い言葉でしっくりくるのは何かといえば「稽古」があります。

力が伸びにくいのが作業で、力が伸びやすいのが稽古ということですね。

では、作業になくて稽古にあるものは何かといたら、その一つが「目的意識」です。

字がうまくなりたい、バッティングがうまくなりたい、漢字を覚えたい、逆上がりができるようになってみたいという目的意識。

これがあるかないかが非常に大きなところですよ。

そしてもう一つが、お手本があるか否かです。

これはお師匠さんと言っていいかもしれないですし、ご助言をくださる方と言ってもいいかもしれません。

とりあえず、お手本があるかないかは極めて大切です。

下手な字がうまくなるためには、お手本の字をなぞるのが一番の近道です。

バッティングもうまい人を見てそのとおりに振る。

間近に教えてくださる方が来て「バットのヘッドが下がってるよ」とか「もうちょっと軸足に体重をかけて」とか言ってくれる。

これが稽古です。

遠方からはるばる来たお客さんたちが驚いた学習の様子背景には、全てにこの「稽古」がありました。

言われたことだけをこなす「作業」では到底たどり着けないレベルに至っているからこそ、前田先生も野村先生も「驚いた」のです。

と、昨日の朝の会でこんな話をしてみたのでした。

実際に、私に言われたわけではなく限界的練習、つまり「稽古」に取り組み始めている子が4-1にはたくさんいます。

強歩会に向けて、朝も昼も放課後もグラウンドを走り続けている子たちがいます。

ある子が自主的に制作しはじめた新聞の取り組みが、多くの子に広がってきていることも既に通信で伝えました。

百人一首でもっと高いレベルになることを目標として、家で練習を積んでいる子たちがいます。

逆上がりなどの体育の技を達成したいという思いで、ひたむきに努力を積んでいる子たちがいます。

自分から日記を書き始めて、それを継続している子がいます。

すでに4年生の漢字ドリルを終えて、5年生の漢字ドリルを自主的に購入して取り組み始めた子もいます。

これらはすべて、「先生に言われてやった」のではなく「自分で考えて行った」のですから、立派な稽古だと言えるでしょう。

こうした学びに向かう土台があるからこそ、教室になんども「驚き」や「感動」が生まれていくのでしょうか。

これからも、作業ではなく稽古を積んでいきましょう。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

